

2006/10/08

社会科学基礎論研究会

ライフヒストリーから論じるということ

—第4章 川又俊則「キリスト教会を継ぐ者の語り—〈牧師夫人〉の母から娘へ—」『ライフヒストリーの宗教社会学』2006:105-126—

日本女子大学人間社会学部

小林 多寿子

- A 語りがうまく活かされているおもしろさと複数の解釈が生じるおもしろさ
- B 第4章前半と最後（「はじめに」「1本論の射程」「2先行研究」「おわりに」）と中間（「3教会を継ぐ〈牧師夫人〉」と「4考察」）の二つのパートで別々の問題を感じるものが何を意味するのか

←ライフヒストリーから論じるときの問題なのか。

初めにライフヒストリーがあり、そしてそこからいえることを論じていくのが実際のプロセスであったの対して、論文の読者はそのプロセスとは異なる組み立てで読む。このことから感じた問題であるならば、ライフヒストリー論文のはらむ問いとして示唆的な考察点となるだろう。

#### 1 <牧師夫人〉のライフヒストリーを読んで

本章は、あるキリスト教会でいずれも〈牧師夫人〉である一組の母娘のライフヒストリーをもとに教会を継ぐこと、そして信仰を継ぐことをめぐる問題を中心に考察している。母Aは、献身者から結婚によって牧師家庭へ「嫁」いで〈牧師夫人〉になり、娘Bは教会を継ぐことを期待されて成長した。二人の語りからは牧師家庭へ「嫁」いで後継を育てるAと、そのもとで育ち、結婚して教会を継ぐ副牧師を勤めるBという二世代間での信仰と教会継承をめぐる問題が鮮やかに浮上しており、大変興味深いライフヒストリー論文となっている。

これらのライフヒストリーは、長い時間をかけたフィールドワークのなかで得られた成果であり、キリスト教の受容と継承をテーマとする筆者だからこそ聞き取ることでできた貴重な二世代の語りであるとおもう。他方で、評者は、筆者がこれらのライフヒストリーから見いだした論点とはすこし異なるポイントを読み取ることができ、その点は複数の解釈が可能なライフヒストリー論文のおもしろさと問題点を示しているとおもう。

具体的に評者はBの語りのなかの二つの言葉に注目した。ひとつは、父の口癖が「あなたが教会生活をおくらないと、自分たちの仕事ができなくなる」(113頁)という言葉であったということである。いまひとつは「三代も続いている教会を自分は背負うんだ」とい

う気持ちを持ち、「私は友だちに説明するときも「宗教を受け継いだ」というよりは「家業を受け継いだ」と言います。」(120頁)という言葉である。

これらのBの語りから、教会は家業であること、とくに職住同一の場所を占める家業であり、子供も家業経営に巻き込まれること、さらに家族全員が家業に関わらないと家業の継続にも支障をきたすこと、家業がそのようなものであることを親世代が子どもに理解させてきたさまが語られているとも解釈された。つまり、信仰の継承というよりも、家業の継承が語られているのではないか。Bの言葉を読むと、教会を継ぐことを家業継承と理解するプロセスがとてもよく表現されているとおもう。Bにとっては、家業意識の形成のもとに家業としての教会となっており、個人の信念をふまえたキリスト教信仰という部分が後景に退いている。

もう一点、AとBの語りから気になったことは、ジェンダー役割意識において非常に保守的であることである。〈牧師夫人〉としての意識には女性/妻/母であることにもとづいた役割意識があるとおもう。サポート的な仕事を担う意識は、「献身」=従と女性/妻=従であることがダブって、信仰のゆえかジェンダー意識からくるのかを見えにくくさせているところがある。この役割意識の形成をめぐる語りは教会におけるジェンダーの問題を浮かびあがらせるのではないだろうか。

## 2 新たな問い

「1 本論の射程」と「終わりに」に対していくつかの問いかけをしたい。

1) なぜ福音派をとりあげるのか。日本のキリスト教信者数は人口の「1%の壁」を突破できないこと、そして伝統的教派の信者数が停滞していながら、福音派の信者数は大きく伸びていることが指摘され、「そこで本論では福音派を事例に扱おうとおもう」とある。しかし、なぜ信者数が伸びている福音派を扱うのか、信者数の伸びている教派とその教派の〈牧師夫人〉との関係にどのような問題設定がありうるのかを問いたい。

2) .信仰継承を考えるのになぜ〈牧師夫人〉に注目するのか。

筆者は、死者儀礼に関する論考で牧師や〈牧師夫人〉の信仰継承を考察する必要性を述べたことがあり、本論ではその問題を具体的に追究とあるが、信仰継承の問題を考えるのに、なぜ牧師ではなく〈牧師夫人〉なのかはもっと説かれるべきであるとおもう。なぜ継承の問題を考えるのに女性に焦点を当てるのか。この点を十分説明しないと、またまた二世代の〈牧師夫人〉にインタビューできたから継承の問題を考えたのかとみなされかねず、ライフヒストリー論文の弱さを露呈してしまうのではないか。

「終わりに」では、「指導者に対する信者としての宗教的立場と、指導者の配偶者という世俗的な立場との間の葛藤」に着目する視点が示されているのだが、Aの語りには、指導者=牧師/夫に対する信者、指導者=牧師/夫の配偶者という立場の葛藤はあまり明確には出てなかったのではないかとおもう。全体を通して、〈夫人〉を扱いながら、女性/妻であることの観点が薄いように感じた。だから一層、〈夫人〉という女性にとりあげることの意

義が問われるだろう。

3) 「共通要因」とはなにか。「キリスト教が当該社会でマジョリティかマイノリティかによる違い、文化的背景や時代社会の影響、さらに教派の違いなど、さまざまな差異はもちろん看過できない重要な要素である。だがそれよりも、共通要因を知見として指摘することを本論で筆者は心がけた」(123頁)というとき、「共通」要因とはなかに「共通」であるのかを明示することが求められるのではないか。「共通」要因が指すものによっては個別のライフヒストリーから一般化をめざしているのかどうかに関わる重要な点になるようにおもう。一宗派にあるいはキリスト教全体に「共通」することなのか。この点は、ライフヒストリーからいえることとはなにかに関わる問題に通じるものである。筆者の長年の調査研究の蓄積をふまえると、フィールドワーク全体の成果を念頭において論じられていることと汲み取った。

最後に示された「信仰の語りを職業の語りとして見直すことで、組織論として宗教集団を見るようなときに役立つだろう。ライフヒストリー全体を見渡すことはこのような効用もある」というところで、評者は「ライフヒストリー全体を見渡す」という姿勢に強く共感しつつ、ライフヒストリーをベースにした今後の筆者の研究の展開におおいに期待している。